

# PREVENTION No.272

平成27年5月21日開催

## その人理解」と「生活づくり」によるギャンブル依存支援

浦和まはろ相談室 高澤 和彦 先生

### 1 「病的ギャンブル」をめぐる立場

最近、マスコミ等で「ギャンブル依存症」という言葉を見聞きする機会と、精神医療の立場からの「ギャンブル障害」への取り組みを目にする機会が増えていると感じている。

マスコミと従来からのアディクション・相互援助グループモデルに軸足を置く人たちは、問題をいわゆる「病気」ととらえ、マスコミの造語である「ギャンブル依存症」を多く使用している印象がある。精神医学の約束事である DSM-5 では「ギャンブル障害」という診断名で位置づけられている。

このように「病的ギャンブル」に対する関心が高まっているが、いわゆる「病気」からの回復や医療での治療という視点からの意見や報告が多い。ともすると依存症対策のシステムや治療プログラムに目が向きがちとなり、一人ひとりの問題の背景やそれを踏まえた支援の多様性については、語られることが少ないという印象を持っている。

筆者らは、ギャンブルの問題を抱える「その人」と社会との関係性に着目し、個別的・社会的な支援を工夫する取り組みを続けている。ギャンブルは事例化のきっかけに過ぎず、ギャンブルや借金などの表面的な問題だけに着目するのではなく、「その人」の生活全体を見て特性や困難を理解した上で、「その人」が社会の中で生活できるように、個別的に必要な生活支援・環境調整支援を組み立てていこうという立場である。こうした考え方をより明確に示すために、筆者らは「ギャンブルの問題」という言葉を使っている。

重要なのは、ギャンブルの問題を抱える人たちに、あたかも共通の支援があるかのようなパターン化が起こることをなんとしても防ぐことである。「ギャンブル」というキーワードは、あくまでも「その人」を理解するための「入口」であり、そこから人間理解が始まるのが立場を超えた共通認識になることを願っている。

### 2 ギャンブルをやめても生活できない人がいる

横浜市瀬谷区に、日本で最初にギャンブル問題の支援に取り組み始めた認定 NPO 法人ワンダーポートがある。筆者は家族相談の相談員としてワンダーポートにかかわっている。ワンダーポートのスタッフ、司法書士、精神保健福祉士、障害福祉に携わる支援者等々、そこに集う専門性の異なる支援者たちで意見交換を繰り返しているが、共通の認識として浮かび上がってきたのは、ギャンブルをやめても生活が立ちゆかない人がいるということである。

丁寧な生育歴・生活歴の聴き取りや生活観察を通して見ていくと、ギャンブル以前から生活が成り立っていない、あるいは、部分的にはできるところがあってもトータルで見ると生活が不安定な人たちがいる。具体的には、金銭管理が苦手、一人暮らしを維持できない、学校時代から不適應がある、仕事が続かない、他者との関係を築くことと

自分を守ることを両立できない、余暇活動の貧しさ、などが見てとれることが多い。

こうした人のギャンブルの問題は、不適応により社会に居場所がないための逃避的な行動であったり、見通しをつける力や自己を制御する力が弱い人がギャンブルに手を出すと当然起こる結果であったりする。二次性的問題であることが見えてきた(なお、その背景は、必ずしも知的障害、自閉スペクトラム症などだけではない。障害とみなすことができない弱点や苦手さなどさまざまである)。

つまり、ギャンブルをやめたところで生活が営めるようにはならない。必要なのはギャンブルをやめるための治療や回復支援ではなく、その人たちが社会の中で生活していくための、具体的な生活支援や環境調整が必要である。少なくとも現在のパチンコ・パチスロ中心の我が国のギャンブル事情の中では、こうした支援が必要な人の割合が高いという確信をもっている。こうした人たちが未だに全ての困難の大もととはギャンブルであり(一次性的問題)、ギャンブルをやめることを基盤とするアプローチにつながられている。当事者活動の中などで「やる気がない」「もっと徹底したプログラムへの取り組みが必要」などと誤解され、傷つき、追い詰められている人がいることも見逃してはならない。

### 3 社会が便利になると不便になる人たち

スマホ、ネット、各種のカード、コンビニなどの社会を便利にする仕組みは、そのプラス面だけを上手に使いこなす能力を持つ人には非常に便利なものとなる。しかし、元々見通しや自制力が弱い人にはマイナス面が作用し生活破綻に直結する。私たちがこうした便利さを求める社会を選ぶのであれば、不利益を被る人たちに対しては、金銭管理をはじめとした具体的な生活支援を行うことが必要となってくる。

さらに仕事を取り巻く状況も大きく変化している。大多数の人が能力や適性に合う仕事に就ける時代ではなくなった現在、「ちょっとした弱点がある」「少し不器用」などで社会に居場所をなくしやすく、パチンコ・パチスロ等が逃げ場となることも少なくない。「その人」に合う環境を探したり、つくったりといった環境調整中心の支援が必要になってきている。

このように社会の変化とギャンブルを取り巻く状況は密接に関係する。少なくとも現在の我が国の社会状況の中では、ギャンブルをやめることを中心に据えた支援ではなく、生活支援と環境調整中心の支援で生活を安定させることによって、結果的にギャンブルの問題を小さくしていく戦略の方が合う人たちが数多く存在する。筆者らの経験でも、金銭管理の工夫、合う仕事を探す支援、住まいの支援、経験を広げそこから学ぶ支援、余暇をつくる支援、障害福祉の支援等々、いわゆる「依存症のプログラム」ではない支援によって、あるいは、ごくシンプルな相談がきっかけとなって(短期介入)、数年単位でその人なりの社会生活を送り、ギャンブルが問題になっていない事例があたりまえに存在している。ギャンブルの問題を抱える人も、その支援も多様であることがわかると思う。

### 4 家族支援をめぐって

同様に、家族の支援も一律というわけにはいかない。一例であるが、筆者は、家族の情報収集力・情報吟味力に着目している。自分の頭で考えることが苦手だったり、思考の柔軟性が乏しかったりする家族に「病気はこう」「対応はこう」などと、あたかも「答え」があるような家族教育が行われると、それが本人・家族の現実と合うか合わない

いかが検討されないまま盲信され、結果的に本人も家族も追い詰められてしまうことがある。家族支援も家族のアセスメントを踏まえて個別的に工夫する必要がある。

家族とともに「正解はない」ことを共有し、ギャンブルの問題を抱える「その人」を理解することを中心に据え、試行錯誤しながら見えてきた「その人」理解が上書きされていくこと自体が家族教育になる。ギャンブルは「その人」の生活に何らかの問題が起きていることに周囲が気づくサインとしてとらえることができ、家族と支援者は今行われている支援の妥当性を振り返り、必要な見直しを行うきっかけとして活用できる。

## 5 おわりに

ギャンブルの問題を抱える本人も家族も多様化してきており、「同じ依存症」として解決をはかるアプローチが有効ではない人が増えているのは明らかである。そうした状況の中で筆者らは、プログラムに人をあてはめていくのではなく、人を中心に「その人」を理解（アセスメント）し、アセスメントを踏まえて支援を考え、その支援が有効に働いているかを評価し、必要な修正を考えていく。実は、ケースマネジメントのプロセスをできるかぎり誠実に実施しているだけである。

また、一方では今ある知見や社会資源では、残念ながら支援が困難な人たちがいることも事実であり、そうした人々を社会の中でどう見守っていくか考えていくことも現実的な課題となっている。

IR 法案に関連して「ギャンブル依存症」対策の必要性が話題に上るが、支援のシステムをつくるのであれば、「みんな同じ依存症」というくりでの一律の対策ではなく、ギャンブルの問題を抱える人や家族の個別性に対応できる真のケースマネジメントを行う態勢をつくっていくことが望まれる。現状では医療からの発信が多いが、「その人」がどうやったら幸せになれるかを考えながら生活をつくり上げていくソーシャルワークの課題としてとらえた発信をもっとしていかなければならないだろう。もちろんソーシャルワークの過程で、心理検査等の評価、精神病の治療、処方薬の妥当性の検討、不必要な処方薬の減薬など、医療ならではの強みとの連携は、今後、さらに模索していかなければならないと考えている。

## 参考

1)ワンダーポート施設長 中村 努のブログ, 一步通信.